

## 宗教者の出番

東日本大震災に際して、宗教者もまた心のケアに関わるべきだと言われ、またそうした動きも既にある。しかし、今、性急に宗教者が被災地や避難所に出かける必要は必ずしもないのではないかと、私はひそかに思っている。

というのも、心のケアが何を狙っているかによって、その担い手の出番も異なってくるからである。ただ震災による心の傷を癒やし、その後遺症を取り除くことだけが目的であれば、その担い手は臨床心理士やカウンセラー、精神科医が適任であろう。心的外傷が癒され、精神が安定して落ち着きを取り戻せば、ケアは成功したと見なすことができるのである。

一方、悲哀や喪失感のために、被災者が生きる意味や生きがいの獲得を求めてきた場合には、宗教者の出番も出てくる。いや、そういう時こそ、宗教者がその本領を発揮すべき時であると言ってもよいであろう。宗教者は、それぞれの教えに基づいて生きる意味を提示することができるし、その意味づけによって人は心の健康を回復するのである。そして、人間が人間らしく生きるためには、生きる意味、生きがいへの問いが必然的に伴うものである以上、この問いに応答できる宗教者の出番も必ずある。

ただし、その出番はある程度、状況が落ち着いてからである。それまでは、さしあたっての心の動揺・不安を鎮めること（癒し）のほうが優先され、生きる意味の模索に手を貸すことはむしろその次の段階である。そして、宗教者の提供する意味ある言葉は、相手が自由な心で受容することが第一の条件となる。そもそも、人が体力・気力とも低下し、疲れきっている時には、意味に関わる言葉は人の心に入ってはいかない。それどころか、宗教者のそうした言葉が—それ自体は救済の思想を表明するものに他ならないのであるが—、逆に被災者の心の傷口に塩をすり込むことにもなりかねないのである。

宗教者による心のケアは、単なる心理上のケアを超えた心魂サイコロジカルのケアである。人が喪失感を心魂のレベルで喪失として受け止めるをえない時にこそ、宗教者の本当の出番がくるはずだ。出番とは、こちらから探し求めていくものというよりは、むしろ向うから訪れるもの、先方から与えられるものではないだろうか。宗教者にはそうした時の到来を待つ余裕が欲しい。

関連して言えば、宗教者が被災地で布教伝道をするのに対して、世間の抵抗が非常に高い理由も、ここから自ずと分かるだろう。布教伝道とは、宗教者がその教えの意味ある言葉でもって積極的に人々を教化する活動のことである（必ずしも自分の教えの仲間を増やす活動という意味ではない）。そうした活動自体は平時においては何の問題もないし、むしろそれは宗教者の使命でもありうる。しかし、震災のような非常時にあっては、人々は心身ともに疲弊し、心の自由を失ってしまっているわけだから、そこにつけこんで、一方的に宗教的意味を押し付けるようなことになれば、それはやはり問題であろう。

## 人間関係の文脈の中で

心のケアの中には心理的な癒しの要素と、生きる意味を与える要素とがある。さらに心の生活はそれ自体独立してあるとい

うより、その人を取り巻く現実の生活と共に存在する。これらは、生身の人間において複合的に一体化している。それゆえ、心のケアもまた、それだけが独立して行われるというよりは、さまざまな社会的援助や対人援助に付随して、またそれらの営みと同時に行われることが実際には多いのである。

なぜなら、心の問題は、その人を取り巻く人間関係、社会関係、物的・経済的關係の中で起きるからである。人間が人=間、すなわち関係の中で生きる共同存在である限り、心のケアはだれもが行い得るものであって、もしかしたら特権的な心のケアの担い手はいないとすら言えるのかもしれない。例えば、病院や家庭での療養生活においても、たまにしか顔を出さない心理相談員や宗教関係者より、ふだん親身になって世話をしてくれる看護師や介護者のほうをむしろ信頼して、悩みを打ち明けたり相談したりすることがあるのも、そうしたところに理由がある。

大切なのは、心だけをケアすることではなく、社会的・人間関係論的な文脈の中での全体的な世話取りケアリングである。心のケアは、そうした全体的な世話取りの中にこそ位置づけられるべきであって、これによって心の健康が回復され、事態の改善を先導することができれば最善であろう。宗教者による心のケアも、その宗教者自身が相手との社会的一人間的関係を安定させてから臨むことが肝要なのは言うまでもない。

## 息の長いケアを目指す

大震災の被災地では、多くの方が大切な人や物、生活空間や地域とのつながりを失っている。こうした喪失体験は、病院での死別体験や、不慮の死また自死した方の遺族の体験、さらには不妊治療を続ける中で女性の体験にも通底するものがあるように思う。そのように考えてみれば、看護の臨床現場で説かれている悲嘆ケアグループの方法論も、宗教者が被災地での心のケアに生かせるだろうし、スピリチュアルケアで種々論議された事柄も役立つかもしれない。

その一方で、心のケアには、人間心理についての基礎知識に基づいた基本的な処方箋はあるが、万能の特効薬は決していないことも知るべきである。心の問題は、何よりも本人自身が解決していかなければならないものである。ケアする側は、その解決に手を貸すことができるだけである。その意味で、言葉で何かを説くことよりも、また何かを積極的に行うことよりも、とにかく相手の傍にすることが大切ではないだろうか。

もし宗教者の心のケアに優位な点があるとすれば、宗教者には神仏という超越者のスーパーバイザーがついているところであろう。宗教者による心のケアが底力を発揮できる時があるとすれば、この超越的スーパーバイザーがしっかりと働いてくれた時である。これを、宗教者が自分の力量だと慢心してしまつては、すべては台無しになってしまう。

人は、穏やかな人間関係、社会関係の中でこそ、生きる意味を確認し、そして癒されていくものである。宗教者もまた生活者である。ともに同じ生活者として関わることによって、当座の支援に終わらない、息の長い世話取りケアリングを行い続ける活動の基盤を見出すことができる。それゆえ、宗教者は長期にわたる人生の伴走者になるという覚悟が求められるのである。